

## 第3回石狩川流域生態系ネットワーク推進協議会 議事要旨

〔日 時〕：令和8年2月13日（金） 15:00～16:50

〔場 所〕：北海道開発局研修センター 2階 講堂

〔出席者〕：委員69名（WEB出席含む）

### 開会

#### ○札幌開発建設部部長挨拶

・本協議会は、多様な主体の連携と協働のもとに石狩川流域の健全な生態系ネットワークの形成に取り組むのが本協議会の目的であり、第9期北海道総合開発計画に掲げる共創の取組の一つ。豊かな自然環境を次世代に残すことが、北海道の価値を高めることにつながる。

#### ○会長挨拶

・「生態系ネットワーク」という言葉は、分かりづらい。それでも、国で気候変動に対応した河川管理や、流域治水に対して、「生態系ネットワーク」や「グリーンインフラ」がきちんと位置づけられている。ネットワークとは場と場のつながりでもあるが、大事なのは人とのつながり。本協議会は、各行政機関、流域全体46の自治体、そして企業が一堂に会する貴重な機会。この枠組みを使いながら、地域の防災、環境をよくするための議論を全体に広げていきたい。

### （1）委員の承認・規約の改正について

○資料1の説明。

○新規委員としてほろむい七草の会を承認し、令和8年2月13日付で規約が改正された。

### （2）令和7年度の取組状況

#### 石狩川流域生態系ネットワーク形成の検討体制について

○資料2-1の説明。

委員 イトウも棲めるまちづくり推進協議会の生息環境ワーキンググループでは、雨竜川と空知川の上流のイトウの個体群について、将来的に各支川下流域や石狩川水系で生息環境を再生していけるように河川整備事業に合わせて具体的な計画策定が進んでいる。

会長 本会議の前にタンチョウと共存できる流域づくり協議会が開催され、農業等との共存や遊水地内の環境整備について議論した。将来的には石狩川流域の旧川などの環境を活かしてタンチョウの繁殖の場を作っていくことも考えていきたい。

事務局 企画部会では札幌ワイルドサーモンプロジェクト（SWSP）の取組と高校生がつながった事例をお聞きし、人のネットワークのきっかけになると感じた。

委員 企画部会後の9月上旬に、企画部会の視察箇所と同じ場所でイオン北海道や高校生と一緒に産卵環境改善を行った。イオン北海道は、活動後も再び現地確認に来るなど関心は持っていただけた。

委員 河川環境の定量目標や水産・食産業面でサケ・サクラマスは重要な種なので、本協議会でサケやサクラマスに取り組むのであればお手伝いしたい。

#### 石狩川流域生態系ネットワークの普及に向けた情報発信について

○資料2-2、資料2-3の説明。

### 【パンフレット（案）について】

委員 1 ページのネイチャーポジティブの図は、白線のみで構成されシンプルすぎる。生きものが増えていく様子が分かり、もっとワクワクするような図を用いてはどうか。

委員 石狩川流域の地図には、6大支川だけでなく多くの支川を表現してはどうか。

委員 ソーシャルメディアの二次元コードを掲載し、活動をタイムリーにみられる要素を盛り込んでどうか。

委員 具体的な取組として、タンチョウと共存できる流域づくり協議会とイトウも棲めるまちづくり推進協議会を強調してほしい。

会長 1,2週間をめぐりに事務局へ意見を連絡いただき、集約することとする。

### 【ソーシャルメディアの活用について】

委員 ソーシャルメディア間で連携もできるので、プラットフォームを選別せず全部活用してはどうか。

委員 効果は投稿する人の腕によるので、若手やSNSに慣れた職員が複数名の体制を組んで、高頻度で投稿するようにできると良い。

### 【ロゴマークの制作と活用について】

会長 制作の途中で一般投票も取り入れるので、委員の皆様にも投票促進等の広報の協力を願う。

## **(3) 次年度に向けた意見交換**

○資料3の説明。

委員 エコハーモニープログラムを通じて保護者への波及効果に特に手ごたえを感じた。試行錯誤しながら取組を進めることが必要。来年度以降は対象エリアを長沼町から千歳川流域（6自治体）に少しずつ広げ、学習から一歩踏み込んで保全のために主体的に関わるものにしていきたい。活動を地域産品の価値向上、観光振興にも寄与するものにしてほしい。

委員 タンチョウとの共存や生態系ネットワークの形成は、顧客からいただいた利益を社会のために役立てるというテーマに合致すると考えて参画した。今年のチアーズクラブのテーマは「生きもの」であり、広く参加者の募集や活動の拡大を検討していきたい。

委員 タンチョウも住めるまちづくりは行政だけでは取り組めないことを企業や地元住民の協力をいただいて取り組んでいる。舞鶴遊水地は農家が農地を提供してきた。今後は治水機能を損なわずにタンチョウと共生することを前提とし、地域経済の振興発展に寄与する利活用を考えていきたい。

委員 宮島沼は、渡り鳥飛来状況や農業環境の変化に伴い、水質の富栄養化と秋播き小麦の食害の課題を抱えている。特に市内住民に知ってもらうことを目的に、市としてバスガイドツアーや特産品PRを行い、人と沼のつながりを様々な角度から作っていかうと取り組んでいる。子どもの活動は大人たちに波及する効果を感じている。

会長 自然共生サイトと地域生物多様性増進法の概要、そして石狩川流域での状況を教えてほしい。

委員 法令に基づく保護地域以外に生物多様性保全に効果的な手段（OECM）を、地域生物多様性増進法に基づいて自然共生サイトとして認定する取組を環境省、国土交

通省、農林水産省の三省合同で進めている。企業価値や持続性向上にも寄与するのでご参加いただきたい。石狩川流域での認定状況は後日共有するとともに、自然共生サイトを本事業に貢献できるように検討したい。

会長 成果の可視化は重要。遊水地でのタンチョウの繁殖などの成果を発信すると良い。

委員 飛行機から河跡湖を眺めるのは、蛇行河川と湿地の履歴が判る素晴らしい体験。プロペラ機であれば飛行高度が低く地形が良く判るので、啓発や情報発信に活用してはどうか。地図付きの啓発資料の機内配備や、SNS 発信、チャーター便での遊覧も可能。

委員 気候変動の影響を受けるサケマスの保全は価値がある。しかし、石狩川流域全体の資源量は把握されておらず、孵化放流事業は水産資源として持続可能な漁業に認められない。これらの課題を解決し、MSC 認証に申請することも検討できるのではないか。

委員 2003 年から 2006 年生まれの放流魚に行った標識放流調査では、6~8 割程度が野生魚だった。現在は放流数を減らして野生魚の割合を高める順応的な管理をしている。野生魚の割合は少し増えたが、自然産卵する川の環境改善が求められている。

委員 石狩川の象徴的な存在であるサケが昭和 40 年代くらいの水準に減少している中で、野生サケを見直す動きは水産側からも高まっている。以前実現しなかった MSC 認証の取得に向けて、勉強会のようなものが出来ていくと良い。

委員 持続可能な調達方針に基づいて、海や森の資源に配慮した認証商品を販売している。協議会の取組の成果を商品として仕入れられればストーリーになるので、できることがあれば一緒に取り組みたい。

会長 やる気のあるメンバーが自主的に活動し、事務局がそれをサポートする形を取りながら、ある段階に達した場合に協議会の取組へ位置付けると良いのではないか。

会長 委員が自主的に発案する取組の内容や会議状況を、興味のある委員や事務局が把握できるプラットフォームを用意すると良い。

会長 湿地は地味だが生態系的に重要な役割を持っている。今後何らかの提案をしたい。

委員 将来的にシマフクロウを本事業の指標種としたり、ラムサール条約湿地を地域で増やしていくような展開もありえる。ネイチャーポジティブのキャラクターなどがあるので共有する。

## 閉会

### ○旭川開発建設部部長挨拶

- ・多様な関係者の連携のもと取組の着実な推進を実感した。石狩川上流域は魚がのぼりやすい川づくり事業により 96 か所の河川工作物に魚道を設置し、愛別町までサケなどの魚類が遡上している。中でも旭川駅南口の忠別川では毎年多くのサケ・サクラマスが遡上して、橋の上から眺める市民も多くいる。引き続き生態系ネットワークを増進して参りたい。引き続き皆様のご理解とご協力をお願いします。

以上